

留学生が悩む日本でのコミュニケーション

～たかが雑談、されど雑談～

『雑談の構造分析』（くろしお出版・2012年5月発行）という著書がある言語文化研究科日本語・日本文化専攻の筒井佐代教授は、「雑談」を対象にした研究をされています。日頃、仕事で留学生に日本語を教えている中で「雑談」は、一番教えにくいという。確かに雑談は「ただおしゃべりをするだけ…」といったイメージがあり、何をどう教えたらいいのか?!という問いが原点に。

「雑談」の研究をする一番の理由は？

「雑談」というものが、「よくわからない」ところに惹かれ、もっと知りたいという欲求が動機につながっている。「雑談」は話題や参加者の役割などの移り変わりが非常にダイナミックで、個人の興味や関心、その時の気分や感情を反映できる自由さがあがりながら、その言語・社会の規範によって制約を受けるという不自由さを兼ね備えているところが魅力的だ。地域や方言によって雑談の仕方が異なり、特に、関西人のデータを分析すると、関西弁の特徴が見えて面白いという。



筒井佐代著『雑談の構造分析』

「雑談」って何なのか?という研究はまだ目新しい

日本語の上手な留学生でも日本人の会話になかなか入っていけないという相談をうけることがある。留学生を悩ませる「雑談」の、体系的な指導が必要だと考え、研究対象として向き合うことにした筒井教授だが、「雑談」とはどういうものなのかと学問的にとらえた研究は目新しいという。これまで、伝統的には談話分析という学問領域の中で相槌など会話の要素に関する研究はなされてきたが、「雑談」はもっと広い概念。そもそも「会話分析」を対象にする研究者はまだ少なく、さらに雑談を研究する人は少数という。「雑談」とは「友人との何気ないおしゃべり」「飛行機や電車で隣になった人とのちょっとした会話」「会議の前に同僚とする小話」などであるが、相手が誰かによって、内容が変わり、分類やパターン化がとても難しい。

留学生にとって日本人の「雑談」とは？

留学生にとって日本人の「雑談」が日本語の大きなハードルになっている。「とりあえず『そうそう』『そうやんな』を繰り返して言う」「出た話題についていく」「相手の言ったことを肯定する」など筒井教授はアドバイスしてみたこともあるそう。日本人には当たり前のようなことが留学生には効果的なアドバイスとなる。ただ、2人の会話より3人の会話はより複雑になり、会話のタイミングや相槌の打ち方はより高度になる。



筒井佐代（つつい さよ）

1988 年大阪外国語大学 外国語学研究科 日本語学専攻修了。90 年愛知県立大学外国語学部専任講師、93 年大阪外国語大学外国語学部専任講師、95 年～ 96 年アメリカ合衆国ミネソタ大学客員研究員、97 年大阪外国語大学外国語学部助教授、2007 年大阪大学世界言語研究センター准教授、12 年同大学院言語文化研究科准教授、13 年同教授。専門は日本語教育学（話しことばの構造に関する研究）。

「日本語の良さ」をわかってもらう

日本語は相手のことを考えずに一人で勝手に話すことのできない言語です。会話でも、相手の話に合わせて相槌を打つためには、相手が何を言おうとしているかを理解しようとする必要があり、相手の考えや感情に寄り添おうとする言語ということができます。

日本語について、「非生産的」という言葉は言い得て妙だと思うのですが、雑談は非生産的な部分があるからこそ成立するもので、全部が論理的で生産的だったら、息が詰まってしまう。相槌のような無意味な音をたくさん出さなければならない日本語は、英語のように中身の詰まった会話と比べると、中身が薄く感じるかもしれませんが、日本語母語話者にはそのような「非生産的」な部分が落ち着くのでしょう。

留学生が、「どうして日本人ははっきり意見を言わないのか」と聞いてくることがあります。喧嘩するエネルギー、その後の修復に要するエネルギーを費やすことなく、微妙な調整で丸く収まる方が良いと私たちは

考えているのだと思います。狭い場所で小さい共同体で小さい体の民族が仲良く暮らすための知恵として、そういう方法を編み出したのではないかと想像しています。

また、日本語の授業では、良い悪いは相対的なもので、「日本語の良さ」という言い方は使わないことにしています。「日本語ではこうしている」ということをわかってもらって、必要な場面ですれをうまく使えるようになればいいと思っています。



留学生とどのように接したらよいか・・・と悩む方がいたら

キャンパスには様々な国・地域からやってきた留学生がいますが、何の言語で話すかにこだわらず、いろんな「国」に目を向けてほしいですね。留学生は、「自分の国を知ってくれている」というだけでうれしいものです。また、留学生は悪気がなく言ったりしたりしてい

ることで、日本人からするとびっくりするようなことがあります。「文化が違えばそういうこともある」と認識しておくでショックが少ないです。このようなことを普段から心掛けておくと、共通の話題作りとなり、「雑談」につながると思います。

